

第六章

超自然信仰

信仰 超自然的なもの

魔術、たとえば、自分の死というものを得るために超自然的な技術を使う、というのが、“宗教”という、たとえば、超自然の存在に対して自分を主張するというようなものと、よく対比されている。原始的な人々の実行とか理論では、その二つの概念を明確に区別するということは、非常に難しいことである：たとえば、魔術的施しは、多分慈善的な精神により教わるものであり、魔術の儀式は、神への崇拝に対して捧げられる儀式として、その遂行者により、まさしく神聖なものとして執り行われるものなのである。それゆえに、死すべきものの持っているもの以上の能力をもつ信仰と、その遂行のすべての体系に対して、唯一つの言い方をもつということが有効なのである。そして、信仰と行動のこの組み合わせが“超自然信仰”と呼ばれるのであろう。

もちろん、原住民達は、現在の学者が受け入れているように自然というものを見ていない。そして、それゆえに、彼らは、自然の法則と呼ばれているものを超越するような概念に対して反対することはできないのだ。しかし、彼らは、すべてがかれの経験の通常の範囲の外にある洞察力に対して熱烈に行動を起こすことができるし、また、そうするのである。アメリカインディアン達は、そうした反応の原因を説明するための様々な言葉を持っている。たとえば、神秘的に、不可思議に、或いは、超自然的に、或いは、とても恐怖、ないしは、荘厳な、彼らを打ちのめす何かを語るための言葉を持っているのである。クロー族の言葉はマクスペといい、ヒダツサ族ではクパと呼び、ダコタ族ではワカンと言う言葉が、そして、アルゴンキン族では、マニトと言う言葉があった。

抽象的な認識にたいして、はっきりと明示されていたので、特別な経験は、同化されたり、あるいは、されていなかったりしている。言葉やその派生語が、人々や、物事に対して適用されるのかもしれないし、また、形容詞的、或いは、副詞的に使われることさえあるのかもしれない。ダコタ族には、たとえば、ワカンダギという、彼の年にしては驚くほどよく話しのできる子供のことを話していた、戦いの中で、魔法の伝説の鹿といわれる1人のクロー族のものが、マスサベの男として述べられていた；神話の中では、同じ添え名が英雄とか魔女に対して適用されていた；そして、同じような語源を持つ言葉のキサパリアと言う言葉が靈感の中に現れる羽のような、非常に重要なものを示し、そして、それが特別な尊敬の念とともに、頭に浮かんできていた。インディアン達には、たとえば、どんなものでもより優れた言葉として、“素晴らしい”と言うことが同じ状況に対して使われているが、それは、異なったときに、違った場合には違った態度をあらわすものとするのは、全くごく普通にできることであった。ときどき、無生物が“超能力”者として扱わ

れたことがあるが、これは、それが奇異な出来事だったからである。一風変わっていて、ある動物を想像させるような形の岩を発見したクロー族のものは、そのを大切に保存し、磨いて、ビーズや他のお供え物と一緒に大事にくるんでいた。そして、それがやがて生き返るものと思っていたのであろう。そして、その所有者は、定期的に彼に長生きと富をもたらしてくれるようにその岩に祈っていたのだらう。



98. ご神体の石とお供え物 Crow 族

最も原始的な人々の観察者に衝撃を与える最初の方法は、超自然能力者が社会的な生活のあらゆる階層の人々にそれを浸透させていた方法である。共同でアンテロープの狩をするときには、コマンチ族の魔術師は、アンテロープのヒズメの装飾をつけた十字のある棒を使い、獲物が逃げないように努めた；群れが囲いの中に入ると、想像するに、彼は、そのヒズメの一つをそっけなく指定して、特定のアンテロープを殺すことができた。和歌の部族では、伝説などに出てくるそれなりの道具を使って、バッファローを仕留めていた。基金のときには、マンダン族は、ホワイト・バッファロー　カウと言う女のグループ(PAGE 104)のダンスが、村の近くまでバッファローの群れをおびき寄せてくれると信じていた。でこでも、輪投げの占いが、バッファローの群れを呼ぶために行われていた。(Page 122) こうした魔術の多くは、ほしい獲物を模倣するとそれが、その動物の捕獲を実現させてくれるという考えに基づいていた。こうした、“模倣したものによる魔術”と言うものが、複雑となった儀式の一部として、非常に沢山の様々な形で、控え目に出てくるようである。タバコの踊りのある一節で、クロー族のインディアン達は、植物の成長を象徴し、そして、それを促進するように、ドラムの撥を空中高く差し上げていた；そして、その回りの、高い農業技術を身につけていた部族たちは、自分達の農業についての知識に頼るばかりでなく、彼らの農業の慣わしの有効性にも頼っていた。

超自然信仰は、経済的生活の中にも浸透していた。そして、それが、戦闘行動のなかで強い力となっていた。クロー族の勇者は、夢とか靈感の中に超自然的な守り神のお告げのようなものがなければ、他の部族の襲撃には、出向くことはなかった。ダコタ族の盾は、その有効性が、そこに張られた生皮の強度よりも、その覆いの上に描かれたデザインを着想させた靈感のほうに依存していると思っていた。クロー族では、敵の部族の兵士に死を与える儀式のなかで、敵を殺すといいながら自分の顔に黒い斑点をつけることが彼らの習慣になっていたので、儀式に使う小道具も黒く塗っていたのであろう。よく戦士たちは、自分と一緒にいくグループが成功を収めるかどうかを占っていた。もし、彼が、アナグマとバッファローの血の混じったものをみながら、敵のをみることを思い描いているならば、その時には、彼は勇気が奮い立つのを感じていた；また、彼が自分自身の頭皮を思い浮かべようであれば、彼は、その遠征をあきらめた。

アラパホ族打は、精神によるひらめきから、装飾のデザインを刷新することさえしていた。平原のインディアン達を一般的に表現することは、白人は新しいアイディアを持つ一方、インディアン達は、夢を持ち、そして、靈感を持っているのだということだろう；そして、ブラックフット族は、蓄音機の発明というものを、創造的な鬼才の成就されたものとしてではなく、それは、その“発明者”に対して、どうやればその装置が作り上げられるのかということを告げた精霊の贈り物であるというふうを受け止めていた。

端的にいうなれば、平原のインディアン達にとって、超自然信仰というものは、日曜日に教会に行くこととは決して同じことではなかった。それは、彼の日常生活に深く影響を与えるものであり、そして、奇怪な出来事に対して説明を与えてくれる何かであった。

靈感

殆どの北アメリカに住むインディアン達は、靈感というものと非常に強い結びつきをもっていた。そして、平原の中では、これらのものは宗教的な生活の中で非常に重要な役割を担っていた。しかしながら、精霊というのは、何時も決まって彼らの有望な保護者達の前に現れるというものではなく、ただ、どのようにするか暗示したり、はっきりとしたご利益を約束したような形で、彼らの耳に聞きとられるようになっていたに過ぎない。シベリアや北アメリカの西部の一部では、超自然信仰の霊界からやってくるものは、求められてくるものではなく、事実、しばしば精霊というものが、将来の被保護者の意思に対して彼の保護的な立場を受け入れざるを得ないような状況になっている。対照的なものとして、ウッドランドや平原のインディアン達は、お告げを得るために故意に寂しい場所に出かけていった。あるクロー族のもの達は、窮地に陥ったときに思いもかけなかったような御利益を得ていた。時として、精霊が死すべきものを助けるために純真な要望から現実の世界に下りてきたというようなことさえおきていた。しかしながら、通常の場合のやり方は、人里はなれた場所に行き、四日間の間、飲み食いせずの断食をするものであつた。そして、精霊に苦しんでいる人のもとに憐れみを持ってくるように祈願した。

クロー族の場合には、普通、彼の左手の指の関節を切り落とすか、或いは、超自然の能力の憐憫を呼び起こすやり方で、禁欲生活に入った。

部族間における確かな違いは、靈感の洞察に対する著しい尊敬の念である。ウッドランドのオジブア族やウィネバゴ族の親は、精霊の息を得るための断食を、多分七歳になる前に、子供達を定期的に教えていた。そして、平原のインディアン達、ヒダツサ族の年長者達は、同じように彼の子供達がかかなり若いときに、お告げを求める手助けをしていた。しかし、そうした忠告のようなものは、クロー族の中には習慣として存在していなかった。そこには、若者達は、生涯におけるすべての成功と言うものが、靈感から導き出されるものであるということを聞きながら成長する姿があつた；だか、馬をどうしても手に入れたいとか、社会的な尊敬を手にしたい思いながら、青年期のものは、戦利品を願いながら、或いは大手柄にめぐりあ得る機会を祈りながら、あるいは、そのほかの利得を得ようと断食をしたのであろう。大人の男や女は、特別な原因があるときにはいつでも靈感を求めているようだ — 彼の子供が病気になったときとか、自分の財産を失ったとき、近い親戚のものを殺した者に復讐をしようと切望するようなとき、などなど。もう一度述べたいのは、アラパホ族は、靈感と言うものを大人たちのものとしてだけ考えていたように思われるということである。

われわれは、では、そうした洞察にどんなことが実際に起こっていたのかと言うことに自づと疑問が湧いてくる。情報提供者の大多数は、彼らが述べている経験の現実性というものをしっかりと信じていた、と言うことに何の疑いもない。こうした現象を心理学的に説明するために、幾つかのことが認識されていなければならなかった。その第一は、神

の探求者は通常非常に強い感情的な衝動を持っていなければ成らなかった ― 彼の仲間達の前で輝きを切望しているとか、或いは、欲望や病気、或いは、報復された血族のものに対する苦悩から解放されることを望んでいるとかの感情であった。人里はなれた場所での閑居により、断食により、或いは、自己隔離することにより、彼は、自づと彼の感情的な状態を高めていった。その上、彼の仲間達から話される神話や、同世代の部族の者達の超自然的な経験についての談話が、彼の気持ちのなかに痕跡を残し、彼の気持ちの中にやってくるその感覚的な印象を形作る手助けをしいたのであった。その時点での彼の切望は、彼の部族の観念的な様式と混ざり、そして、高い異常な状態で経験した響きや光景と混じっていき、このようにして、見たり、聞いたりしたことの説明がひらめくのであった。かな上にして人格的な異常性も入ってきた：優れた聴力を持ったインディアン達は、一連の区別のつかないような音を思い描くことができたのであろう ― 鳥の鳴き声とか、枯れ葉のさらさらした音とか、近くにいる馬の気配とか、見知らぬ部族の話しとか、何やかやと。もし、彼のものが明らかに目に見える形のものであれば、かれは、たとえば、襲撃隊になったときに、彼が盗むべきものを思い浮かべることができるというような、具体的な詳細の姿を見ることができたのであろう。― たとえて言うなら、尾を切り詰められた鹿毛の馬とか、重厚な鬘(たてがみ)、そして、足に塗られたジグザクの線といった具合である。自分自身の啓発のために、常に感動を持ち続けようという男は、或いは、聴衆に対して明確な言葉を与えようとするものは、首尾一貫した沢山の夢を与えようと試みるときには、われわれ自身の中にいたのだ。だましたり、或いは、でっち上げたりしようとはせず、溝を埋めながら、以前の説明を聞いてかれになじみのある、部族の靈感の形態に、彼の経験の記憶を当てはめながら、彼は無意識のうちにそのあいまいな点を克服していたのであろう。

そうした形態のいい例が次のようなケースである。何人かのクロー族の情報提供者は、人里離れた場所での徹夜の際に、どんな風にして彼らが精霊を見たのか、或いは、どんな風にして精霊が馬にまたがってくるのか、さらには、自分達の生活の場の周りにある岩や木が、馬の飼育者を襲撃した敵、しかし、彼らは、何の傷跡も残さなかったのだが、その敵に変わったのかと言うような話をする。こうした幻影の象徴的な意味合いは、精霊と言うものが、空想的に不死身のものを作っているということなのである。もちろん、このことは、非常に大事にされた天の恵みではあるが、しかし、多くの人たちは、個人的には、景観が変化した断片により攻撃された、精神的な馬の乗り手というものを具体的に思い描くことは受け入れることができなかった。とりわけ、こうした物語の話し手の個人的な経験の内容から離れて伝統的な物語の中にも非常に似たような典型的な話が出てくるようなときにはである。間違いなく、想像というものが、それがたとえ初めて作られてものであるにしても、その部族の民話となり、そして、特に不死身なものを切望している人たちによるお告げの物語の中に、たちまちのうちに取り込まれていった。もう一度言うなら、それは、まさしく、殆どのクロー族のインディアン達が彼らの精神的な天の恵みを閑居の生活の四日目に手にしたという部族の様式の一つとなっているのである。ちなみの、この四

という数字は、この地域の人たちにとっては神秘的な数字なのである。

人々を助ける超自然的な存在は、その性格が実に後半な範囲に渡って変化する。動物たちは、非常に頻繁に平原のインディアン達の頭の中に出てきていた；バッファロー、エルク、鹿、ワシ(ワシは、羽根を羽ばたくことによれ稲妻を起こす鳥と考えられていた)、そして、アメリカチョウゲンボウなどが、常に語り手の頭の中に姿を見せていたが、しかし、犬とかウサギといったような貧相な小動物は、殆どでてきていなかった。ポウニー族の伝説では、蚊に対する祈願というのが述べられており、そして、クリー族の言い伝えの中に、蚊が、部族の男に部族長の地位をあげたというのがある。この不思議な矛盾というものは、インディアン達にとっては、そんなふうには認識されていなかったようである。クロー族の物語は、タカに追われたウサギというのは、インディアンに、もし彼が自分を猛禽から守ろうとしたときに彼に超自然の力を間違いなくもたらしてくれるというものであった。これに対応して、ポウニー族の少年は、比較的単純な困難からも逃れことのできないようなネズミから超自然的な救いを得るのである。このことは、動物達と言うのは超自然的な能力を持っはいるが、それらは、特殊な奉仕については、人に依存しているのであり、そのために、彼らは報いるのである。天空の保護者は、特にポウニー族では星が、これまた、よくあらわれた。同じように、多かれ少なかれ人間の姿に似たような架空の生き物が靈感の中に出現している。たとえば、非常に強い筋肉を持った小人などである。時々、こうした保護者達は、人々の身なりをしてやってきたが、しかし、消えてゆくときには、彼らの真の姿を呈したり、或いは、彼が何であるかを見付けだすような手がかりを置いている。

クロー族では、この保護者と被保護者との関係を父親と彼の子供の関係として説明していた。そして、靈感の風説が非常によく分かるように、採用の方式を表明するものとして精霊というものを引用していた：多くの場合、精霊は極普通にクロー族のものに神聖な歌を教えていた。彼に、戦闘の間ではどんな風に衣装をまとうのかとか、もし、彼が医者になったとしたら、どんな薬や治療の道具を使わなければならないのかなどについても彼を教育したり、食事を制限するためのある種のタブーや行いを取り入れたりしていた。そうした規律の侵害はどんなものでも、保護者からの保護がなくなったり、或いは、恐ろしい苦難を受けたりする罰を免れうるものではなかった。しばしば、幻視者は、彼の靈感のある印を、或いはそれを描いたものを身につけていた、いうなれば、彼の盾の覆い(Fig. 61)であるが、そればかりでなく、精霊により暗示された神聖なものの揃いを中に収めた包みの“葉の束”を構成する内容物を集めた継続的な靈感の強さも持っていた。ポウニー族のこの包みには、小さなパイプ、タバコ、塗料、ある種の鳥、そして、トウモロコシなどが包まれていた — これらはすべて、バッファローの毛皮で作られた入れ物にまとめて入れられていて、この入れ物は、小屋の壁に吊り下げられていた。この包みを開けるといこと、そして、その中身に手をつけるということは、非常にはっきりした儀式を伴うものであった。すでに述べたように、そのような原住民達が、絶えずそうしたものを彼ら

自身の正当性、の中で神聖化されたものとみなしていたかどうか、つまり、彼らが、それらを、いかなる個人的な精霊からも完全に独立した盲目的な崇拜物にしていたかどうか、或いは、彼らが、精霊の贈り物として、ただ単に神聖化されていたものであるがどうかについて言及することは困難なことである；それは、別の時代になればそれに応じて変化する人々の態度と同じように変化しているのである。

もし、靈感のために、ある個人が、すべての超自然的なバッファロー、或いは、ワシ、そして、三番目には、明けの明星よりも上に位置づけられて崇拜されるのであれば、どのようにしてこうしたいくつかのものがお互いとの関係から序列付けされるのかという疑問が湧いてくる。コマンチ族やクロー族についてみれば、部族の者達の私利私欲の衝突があるときに、そして、それぞれの男が、彼自身の保護者の加護に頼るようになり、どの保護者がもっとも強いのかということを示すものに立ち返るときにのみ、この問題が起き上がってきた。宇宙の普遍的な体系がないときには、宗教的な意識が、個々の霊界からやってくるものよりもっと重要であると考えられた。こうして、かつてインディアンが著者に彼が、鳥の霊界の形見として大切に保管している羽は、この世で最も偉大なるものであると話していた。これとは全く対立するようなものがポウニー族のなかにある(page 165 参照)。彼らは、彼らの信仰を論理的な体系の中に持ち込んで、宇宙の運行を規制し、わずかの女神たちにより遂行されている指令を下している、ティラフという名前の究極の存在をあがめていた。ダコタ族の呪術師により述べられた言葉が、抽象的な憶測と融合に似たような愛好の傾向を暗示している。ここで、いまだ答えの出されていない質問は、彼らの時代における平均的なポウニー族やダコタ族の人たちが、聖職者の一般概念により実際に導かれていたかどうかということ、或いは、現実の生活のなかで、あからさまにそれを拒絶せずにクロー族の体系についていったかどうかということである。

すべての人たちがお告げを切望していたけれども、それらの全部の人がそれを手にすることができたというわけではない。普通に、それがうまくいかなかった人たちは、その結果として、生涯を通じてうまくいかないということを運命付けられることを望まなかった。クロー族や、そのほかの部族のものは、うまくいった預言者が、彼の能力の一部を、もっと不幸な部族のものに譲ることを認めることによりその矛盾をといていた。彼の保護者が彼に採用したように、彼の信望者のそれぞれに、彼の神聖な道具一式の複製品を作り、彼に神聖な歌を教え、そして、祈祷と結びつきたいかなるタバコの儀式の違反に対して忠告を与えながら、それを彼らにも採用したのであった。

をら

呪い師（まじないし）

個人的な靈感を持つことのできない人たちとは、相容れない極みは、彼らの著しい成功により誇示されているように、精霊から例外的な力を授かったインディアン達であった。こうした人々は、マスシペとか、ワカンと呼ばれるような人たちで、これは多分英語では、

“呪術師”に当てはまるのかもしれないし、また、シベリアの適当な言葉を借りれば“呪い師”に相当する。

ワフペトン・ダコタによれば、この呪術師は生まれる前には稲妻たちの間で生活していて、生まれる前から、死すものでもある彼らに将来起こりうる様々な知識を享受していた。彼らの社会的な役割は、彼らが稲妻から呪い師としてのやるべきことを開始するような神の印を受け取ったときに、彼らの能力が完成し、これをもって始められた；神からの指示に従おうとしないどんな呪い師も稲妻から刑罰を与えられ、時には、殺されるというようなこともあったのだろう。部族の者達に施すべき奉仕には、病気の治療、敵の戦士の居所を突き止めること、そして、なくなったり、盗まれたりした資産を取り戻すことなどであった。彼の能力を証明するやり方として、呪い師は、人々を招集して大きな会合を開き、そこで、かれは奇跡を起こす人としての自分を認めさせるためにごまかしをやっていた。

こうした超自然的な演出の冴えたる作り上げられたものがポウニー族のなかにあった。彼らの呪術師たちは、ある意味において、よく訓練されていたので、あたかも聖職者のごとき風格を幾分携えていた。彼らは沢山の信奉者達に支えられた偉大なる奇術の精通者だった。とはいえ、殆どの呪術師たちは、彼らの能力を様々な生き物から得たものと思われていた。従って、靈感のなかの本来的な経験は生気に溢れた要素を残していたのである。夏の終わってから秋の初めころに、すべての手先の早業師たちが、村の中に定められた1軒、もしくは、2軒のアースロッジに、自分達の能力を誇示するという目的のために集まり、弟子達の助けを借りて、幾つかの仮小屋を建てていた。亀の彫像がきれいにされた火場所にすえられ、新しい火場所がその後ろに作られた。そして、儀式に使う切り倒された木が、火場所を取り囲むように、川にすんでいる神秘的な怪物を想像させるものがおかれ、その枝分かれした尻尾のところに位置しているスキディ・ポウニーのそばに植えつけられた。実物大の粘土でできた女の人形が、南側の端に置かれ、毛皮で手来た大きな男の人形が、その小屋の上の柱の上部に取り付けられた。そして、沢山の小さな人形が、これもまた、毛皮でできていたのだが、これらが、組み立てられた場所に取り付けられた。火は、太陽を象徴しており；粘土の女の人形は月を；大きな男の彫像は明けの明星を、そして、沢山の小さな人形は星を表していた。

奉納の儀式のあと、村を通るとても印象的な行進があった。その時には、それぞれの呪い師は、自分の守り神である動物の服を着て、その動物の動きを真似ていた。それから、信奉者達がもう一度神聖な儀式のために小屋の中に入ってきた。そのあと、目をひきつけるようなショーをはじめるために扉が開かれた。他の仕掛けの間に、見物人の凝視する前で、トウモロコシの茎を魔法で成熟させるという技が披露された；そして、熊の呪い師は、人の肝臓をちぎりとり、それを食べているような見せ掛け、そのあと、その男を無傷の状態で起き上がらせていた。

手先の早業は、俗人を感動させる決まったやり方だった。ポウニー族のイルスク呪い師、素手で焼けたトウモロコシの鞘を握り、煮立ったスープの中から肉を取り出したり、

或いは、真っ赤に焼けた石の上に立ったりしていた。こうした仕掛けは、ダコタ族のものと非常によく似ていたが、ダコタ族は、アラパホ族、グロス・ベントレ族、そして、シャイアン族の業師らとともに、他のものに混じり、火の上を歩くという芸当を共有していた。他の、ビックリするような離れ業は、マンダン族やヒダツサ族にもあったと Maximilian が記録に残しているが、それは、動物や植物を自分の体の中に隠し、そして、それを見物人が驚いている前で、再び呼び出すという芸当であった。実際に王子は、ヒダツサ族の女が、“彼女の中からトウモロコシの穂軸を踊り出させる”と言うのを見ていたし、別のインディアンは、バッファローの子供が彼の体のなかで腹を蹴飛ばしているような感覚があったと断言していた。クロー族の情報提供者は、ある歌が歌われると、彼女の体の中にいる馬が彼女の口から尻尾を突き出して、出てこようとしているといていた。

時には、クロー族の呪い師たちは、公衆に対して彼らの力を競い合うということもしていた。1人の男、もしくは、集団で、彼らに対抗した連中をやりこめようとしていた。

おそらく、病気の最も常識的な初步の理論は、その原因を病人の体に外部から入ってきたもののせいにするものであった；だから、医者には吸引などによってそれを引き出そうとし、病人やその親戚のものに破片とか、トゲなどの苦痛の種を、また、場合によっては、とてもそれが病人を苦しめているとは思われないようなものを見せ付けていた。こうした認識は、われわれの地域でも見ることができる。たとえば、つい最近、**Bull-all-the-time** という名前のクロー族のものが、パイプの茎を使い、止んでいる場所から、骨とか、黒い虫、或いは、肉の小片などを吸い出して、沢山の病気を治していた；しかし、彼は、傷やへびに噛まれたのを直すほかの治療に対しては、これをおおいにけなしていた。吸引によるこうした処方方は、明らかに、小手先の早業であったようだ。

病気は、仮に呪い師の精神的な保護者が命令したような規律が守られないようなときには、呪い師に、また、彼の病人にもひどい苦しみを与えたようだ。こうしたことで、たとえば、犬が医者の前を横切ったというだけで、病気の男には、それが致命的なことになったのかも知れない。夢のなかとか靈感の中で、彼に食料を与えることが禁じられている人は、みんな、同じ苦しみを味わう義務があったのだ。

妖術は、ここでは、プエブロ族の間のようにそれほど知られてはいないが、平原に住んでいたインディアン達は、時々、彫像を使う魔法に救いを求めている。1890年代に、コマンチ族のものが、反逆の疑いがあると首謀者を疑い、彼を思い浮かべさせるようなものを作り、そして、これに泥をぶちつけた；そのあと、彼らは、彼を擁護しようとしたが、彼は、結局、出血多量で死んでしまった。同じような人々は、仲間達に危害を加えるような働きをしたということで、よく、魔法使いを殺していた。このような行いは、大盆地のインディアン達には、習慣的なものであったが、しかし、少なくとも、中央部の平原に住んでいたインディアン達の部族では、こんな形では処理されていなかったようで、ここでは、別の呪い師の助けを借りて、その憎い呪い師の魔法を効かないものにしていたようで

ある。

他の医学的な技術の中には、マッサージとか、タバコを吸うこと、出血させること、吸引だまを使い吸引すること、さらには、焼いたサルビアの葉を用いることなどが含まれていた。アラパホ族の医者、病気の子ども、木の根とか過ぎの小枝を焼いて出てくる煙で、いぶして消毒したり、或いは、ハーブを熱くなった石炭の上において、そこから発生する香りを胸いっぱい吸って、同じようなことをしていた。発汗小屋 (page 168) は、まさしく宗教的儀式主義の冴えたるものではあったが、それはまた、こうした魔法のためにも使うものでもあった。少なくとも、アラパホ族とかコマンチ族のような沢山の部族で、こうしたことが確認されていた。

聖職者達

文字通り呪い師たちは、超自然的な生き物による個人的なつながりを通して、自分達の立場を受け入れていたが、一方、聖職者は、精霊の世界との直接、面と向かい合った相互関係が必要ではなかったが、しかし、宗教的な儀式を執り行うときの法的な権限を持っていなければならなかった。つまり、言い換えれば、彼は、彼の行動のために訓練をされていたのだ。先にも述べたように、ポウニー族の呪術師たちは、彼らの動物の相談相手の美德を持った呪い師であった；しかし、彼らは、彼らが特別な行動の規範を示さなければならないというときには、聖職者でもあった。あるものは、小屋のなかで永代の場所をとることが許される前に、それぞれが、もし、失敗したときには追い出される可能性もあったが、指導者たちに対して彼の技量を披露しなければならなかったのも、自分達の司祭としての叙階の言葉を話さなければならなかったのかもしれない。しかしながら、ポウニー族は、自分達の職務上の地位を、聖歌の中の神聖な歌についての知識、そして、商況的な儀式の手順の意味についての知識と結びつけていた沢山の人を抱えていた。つまり、この部族は、正確に、司祭職を持っていたと言われることができる。さらに特別なことには、聖職者達は、ポウニー族の行政組織の管理の下にある神聖なる包みの体系にも関係していた。13 のスキディ村のそれぞれが、その包みを保有しており、それは、春の最初の雷がなったときに、その保管者はお供え物をし、伝統的な儀式を執り行い、それを開かれなければならなかった。四つの包みは、未だ、未熟とされ、五つ目のものが、これは星に関係したものであったが、これがすべてのものに優先していた；こうした包みの聖職者は、名ばかりの酋長などよりもずっと高い権威を持っていた。通常は、4 人の聖職者は順番に、人々の繁栄について、とりわけ、バッファローの狩の成功についての責任を一年の間負っていた。これがうまくいかなかったときには、宵の明星の聖職者は、彼の役割を果たす同僚と取って代わるように頼まれた。この司祭者の職は、厳密な世襲で、その職を持つものは母方の血筋の中の次の血縁者へと引き継いでいった。

ウィネバゴ族のような、あるアメリカ原住民達は、来世のこととか、そこに安全に到

達することを非常に問題にしていた。この考え方とか、或いは、こうした願いは、平原に住んでいた殆どのインディアン達には異質のものであったようだ。魂の復活と言うような普遍的な原住民的信仰は持っていたが、そこには、死後の世界での名誉とか刑罰、先祖に対する崇拜、死後の存在を示すような丹念に描かれた肖像などというものへの関心はなかった。通常、彼らが考えていたのは、死んだ人は、彼らがまだこの世で生きていたときと同じように、あの世でもバッファローの狩をし、ゲームを楽しみ、そして、彼らが以前に住んでいたのと同じようなティピーのなかで生活しているというものであった。こうした信仰は、精霊の世界に行ったけれども、また、再び、この世に戻ってきた人、たとえば、死んだと思われた人が、意識不明の状態から再び息を吹き返し、そして、遅かれ早かれ、彼が死んだと思われていた間の彼らの旅の間の出来事をさもありがちに話しをする、そんな人たちの話に基づくものであった。

多分、想像されるように、ポウニー族は、この問題については、彼らの一般的な世界観(以下の項を参照)のなかに自分達を組み入れてゆきながら、考え方を丹念に築き上げていた。魂というのは、星々の世界の中に戻りために大空を旅していた；勇気のない者や、病気で死んだものは、一緒に、天の川を旅して南のほうにある精霊の世界に辿りついた；酋長と僧侶は、特別の道を辿って、その素晴らしい目的地まで到達していた；そして、呪い師もなた、彼ら自身の精霊の村を持っていた。あるポウニー族の男の観念によれば、病気という星に見られたために病気で亡くなった人々の魂は、その南の星の家に持っていかれるのであり、一方、明けの明星があらゆるほかの運命を支配しているというのである。

この魂にかかわる考え方に関して、クロー族は、墓場によく現れる幽霊と、来世に旅をする魂というものをはっきりと区別していた。彼らは魂というものを動物達に属するものだと考えていた。マンダン族の考え方によれば、人は四つの魂を持っており、その中の二つは、それぞれ、白いサルビアとマキバドリにより象徴化されたものであるが、これらがやがて合体して来世の精霊を形づくると考えられていた。三番目のものは、その人の小屋と結びついたもので、その後が残っている限り、その回りをうろついていた。一方、四番目の魂は、時には村に残っていることもあったが、定期的に人々をおびえさせるために戻ってきたということであった。

世界感

平原に住んでいたインディアンのすべてかどうかは分からないが、彼らは、最高の女神がややこしい問題であると考えていた。すでに述べたように([page 160](#)) 明確な答えがポウニー族には出来上がっていたようである。彼らのティラワは、この世の創世されたときにすでに存在していて、そして、アティラ、(トウモロコシ、或いは、天空の丸天井から生まれた)と結婚した。彼は、他の神々に、どこに位置すべきか指示を出し、そして、あらゆる物事の母である宵の明星を通じて、彼らにさらなる命令を下した。彼の意思に従い、宵の明星は明けの明星と、そして、太陽は月と結婚した；、太陽により生まれた男の子と

同じように、前駆体から発生した女の子が大地のうえに置かれ、そして、彼らは結婚した。他の女神もまた、人類を創造した。土の住人達は、インディアン文化の基礎を受け入れ、そして、神々から、儀式に使う包みの贈り物と、宵の明星により示されたそれに関係した儀式を手に入れた。ポウニー族はこのようなしてかなり複雑な神話を発展させた。とくに、それらのすべてはティラワに従属するという、儀礼の意味を大事にした。

確かに、他の部族の殆どは、そうした密接に結びついた体系と言うのは何ももっていなかった。クロー族は、たとえば、太陽をとて目立った超自然の存在として認めていたし、そのために、非常に稀ではあるが、幻のようなものになって現れたけれども、祈りや靈感の世界では仕切りに救いを求める対象であった；発汗小屋は、彼の名誉のなかでも冴えたるものであった；そして、白子のバッファローがいつも彼に捧げられた。しかしながら、こうしたインディアン達は、全体的には、それが最も能力のあるものと認めることに固執していなかった；危機に陥ったときに、彼らは、基本的には、彼らの個人的に保護者に頼った；そして、かれらは時々、かれを **Old Man Coyote**、彼らは一般的には、木とか、人、そして、人間の文化を創造したものであるが、しかし、彼は、また、彼の生涯の間に沢山の逸話のなかに出てきて、全く無節操ないたずら者なのであるが、そのコヨーテと呼ばれる神話上の偶像とをうまく区別することができなかった(page 127)。

儀式

超自然的なものの存在を信じていた原住民達は、ある種の行動により安らぎを得ようとしていたので、信仰と祝賀を切り離して考えることは困難である；そして、ある定まった手順が雨をもたらしてくれたり、或いは、そのほかの願い事をかなえてくれたりしてくれるときには、そのようなことをするのであろう。それゆえに、先に述べたような信仰に関する説明は、それに関連した慣習についての言い伝えから切り離して考えることはできない。しかしながら、この次のページにも出てくるように、それに関する行動に注目の目がそそがれる。それらをまとめたものが、“儀式”とか、“典礼”と呼ばれているもので、そのなかの個々のものは、便宜上、“儀式形式”と言われているものである。大盆地や高台の地域に住んでいるインディアン達と恒久的な信頼関係を築いていたことを明らかにしている、コマンチ族のような、西部の辺境地域に住んでいたインディアン達を除いて、平原に住んでいたインディアン達は、明らかに典礼に打ち込んでいた；史実、この考え方に従い、ポウニー族は、プエブロ族、彼らはこの大陸のなかでは最も高度に発展していたのであるが、彼らにいろいろと接触している。アイオア族は、タバコを吸う前に、口いっぱいのタバコの煙を上に向けてプツと噴出し、天の精霊にタバコを捧げたというように、祝賀は、おそらく単純で簡素なものなのであろう。他の辺境地域では、サン・ダンスとか、マンダン族のオキパのような四日間にわたる祝宴、いずれも数週間の訓練が必要なものであるが、こうしたものが執り行われていた。こうした大事な儀式には、少なくとも、見物人や、ある意味ではあまり重要でないような者たちも含め、たとえ、儀式のある部分

が内密に行われたときでも、部族全体で実施されていた。ある種の包みの儀式のようなものは、限られた集団、或いは、個人というばあいさえあったが、それは私的な行事であった；そこで執り行われるものは、それにかかわる人たちにとっては、最も重要なものであったかも知れないが、しかし、明らかにそれは、決して派手な見栄えの期待を満足させるものではなかった。

平原のインディアン達のように裕福なものは、儀礼尊重をしたが、他の原住民部族の中のある種の有力者たちは、あまりそうではなかったし、また、そうしたものは限られて人たちのものだった。このように、これは、特にカリフォルニアの地域では重要なものであったが、少女の思春期祝う仰々しい儀式は、部族によっては(クロー族、アラパホ族、ブラックフット族) 執り行われなかったか、或いは、単に、気に入った娘だけに行う(ダコタ族) というようなこともあった。地域によっては、少女が思春期になる祝賀では、彼女は、四日間、隔離され(クリー族、アシニボア族) 、その間は、彼女は、ある特殊な棒を使う以外は、頭を搔くことが許されず、非常につつましい食事しか食べられず、そのあいだ、女性としての仕草の指導をうけた (page 62) 。しかしねこうした習慣は、別の異なった手順をもっていた儀式があったので、これにより軽んじられていた。エーストラリアや、フィジーのティエラ族とは対照的に、少年が、女達を支配するというような一人前の男の社会に入る、その責任を持ち始めるという儀式はなかった。事実上、月経のようなタブーは、女性にある種の制限をもたらしたが、妻は、神聖な儀式のなかで彼らの夫の手助けをよくしていた。そして、特別な例として、最も高貴な儀式の事務所が、女性達に解放されていた。確かに、信仰そのものは、靈感の中心的なものの見方、これは、個々人が個人的なお告げに基づき伝統的な手順に新しいものを付け加えたり、これを手直ししていくことができたので、詳細な点において様々な変化をしていたのであるが、これにより強い影響を受けていた。そして、宗教的な同胞愛をもつ新しい仲間や一派を見つけ、初心者などを受け入れてゆくことができた。一般的な超自然の能力を持った保護者は、特別な組織に導いていたのだろう(ダコタ族、オマハ族など) ；オマハ族のインディアン達は、超自然的なグリズリーとか、バッファロー、ともに、それぞれ、その名前の集団社会をつくり、そして、その動物を真似た踊りが作られていたがねこれらにより加護を与えられていた。このことは、ついでながら、平原に住んでいたインディアン達の間には、確かに、他の地域に住んでいたインディアン達ほどではなかったけれども、そこに動物の人格化というものがあつたことを示している

儀式の様式

沢山の儀式が、単独、もしくは、一連の大きな行事のなかの一部として実行されていた。

そうしたものの中には、奉納品や祈祷文、神聖なものを包んだ包みを厳肅に開くこと、祭りの執行者の顔や体に塗ること (Fig. 99) 、発汗すること、神聖な歌を歌うことなどが含まれていた。こうしたもののわずかのものが、さらなる恩恵をもたらした。

祈禱文と奉納品は通常は一組であった；そして、しばしば、奉納者は、彼の望みが満たされたときに用意されている贈り物をさらに捧げるつもりだと誓っていた。事実、アラパホ族のものは、たとえ武闘集団社会のものであっても、もし、かれが病気とか危険を免れたようなときには、その執行を誓っているものは、すべての儀式に対して彼が堅く誓った様式を遂行していた。精霊と礼拝との間にあるべき契約的な相互関係が、カンザ族の戦闘の酋長による、太陽(Sun)の祈りの中で、説明されていた：

“私は、ポウニー族のものを殺したいのだ。私が戻ってくるときには、是非、馬を持って来たい。なんとしても、敵をやっつけたいのだ！ O Wakanda 様、私は、キャラコのシャツと毛皮の奉納を誓います。そして、肩掛け毛布も捧げます。もし、あなたが、ポウニー族を殺し、無事戻ってくださるよう、守ってくれるのなら！”

盾、これは神聖なものであったが、通常、カバーがかけられていた。自分をさらけ出す前に、クロー族の酋長は、燃えた石炭を取り出し、そして、心地よい香りを出すために野生のにんじんの根を焼き、彼の盾をその火に上にかざした。そして、それを、ちょっとだけ上げたあと、今度は、それを少し下げ、再び、今度は少し高く持ち上げ、といった具合にこんなことを四度ほど繰り返す。そして、最後にそれを空高く上げて、その二つのカバーを取り外しにかかった。この例は、神聖な数というものが、それに従って繰り返される儀式の手順や、重要な行動に対して影響を持っているということを説明している。しばしば、三という数字は、三つの見せ掛けの意味であった；儀式の執り行われる小屋にティピーから出かけてゆくときに、それぞれのたびごとに、前に出した足を引き戻し、そして、四度目に実際に出発をしたのであった。

計り知れないほどの重要性が、靈感の中で教えられた歌に結び付けられていた；ブラックフット族の医者の力は、元来彼の典礼聖歌の中にあるものと信じられていた。そして、それは、彼のもっているほかの宗教的な資産と同じように、他のものに譲ることは許されなかった。平原のインディアン達は、彼らの神秘的な数字にあわせて、歌を繰り返し歌っていた。最も優先的であった数字は、疑いもなく四であったが、しかし、七と言う数字もやはり大事な数字として同じ部族の中にあったのかも知れない；ブラックフット族では、彼らが儀式で使うものを、三つの見せ掛け行動のあとに四つの行動で取り扱っていたのであるけれども、このために七回、儀式の歌が歌われていた。

この地域の場所によっては、蒸気の風呂が、治療のよいものと高く評価されていた。そして、最近になり、クロー族やブラックフット族のインディアン達は、それをまるでスポーツをするかのごとく楽しんでた。しかし、現在なお、その飛びぬけた重要性は儀式上のものであった；ある部族の間では、発汗と言うのは、どんな大事な儀式であれその一部を遂行する前に、必要とされていた身を清めることそのものであった。この発汗をしている間、インディアン達は、柳の若木でできた低い丸屋根の形をした場所を選び、その真ん中に火を起こすための土を掘り、真っ赤に焼けた石をそこにおいた。この小さな子やには、中が真っ暗になるように、毛皮をすっぽりかぶせた。石の上に水を注ぐと、そこに



99. Blackfoot 族の呪術師の化粧、頭飾り、そして、ネックレス

いる仲間達はたつぷりと汗をかいた。彼らの体を冷やす段には、覆いをちょっとの間だけ取り除き、この操作を何度も繰り返していた。そして、最後(多分、四度目)の発汗が終わると、この小屋に入っているものは、汗を滴り落としながら、近くのクリークに駆け込んだ。また、冬には、雪の中を転げまわっていた。クロー族の発汗小屋は、太陽への捧げものとおなじように受け止められていたしきたりであった。しかし、詳細なところが社会的な慣習とむすびついていたように、宗教的なかわりは部族によって変わっていた。クロー族の場合には、大体は、タバコの儀式の手順の手ほどきをするようにではあるけれども、女も許されていたが、ブラックフット族では、女は除外されていた。枠を組み立てる柳の木の小枝の数は、場合によって違っていた：クロー族やブラックフット族では、14 本が普通であったが、クロー族は、100 本くらい使っていたこともあるようだ。この数は、ブラックフット族の場合は、サン・ダンスのときの基本的なものとして考えられていた。規則として、4 人が、発汗に参加していた。

発汗小屋は、カリフォルニアでは蒸気を使っていなかったが、大西洋岸から太平洋岸に至るまで、北アメリカの広い範囲にわたって普及している。現代のフィンランド地方で見られるサウナや、或いは、16 世紀にスカンジナビアで見られたサウナについても、これらは、北アメリカで見られたものと非常によく似た手順で実施されており、こんなことからこうした習慣が、どこか単一の中心地から派生して言ったのではないかという疑問が持ち上がってくる。 儀式を行う建物の一角に、神聖なものを飾るため、或いは、いい香りを煙立たせるために特別に用意された場所は、便宜的に祭壇と呼ばれていた。ブラックフット族の場合には、草とか、表面の土を取り除いた囲炉裏の後ろにおいた壺に入れて、草の束をいぶしていた。彼らが好んでいた香りというのは、天草といわれた草から発する香りであったが、しかし、それは、祭壇の大きさや、形が違っていたのと同じように、いぶされる植物は、束によって違っていた。神聖な壺は、色のついた土で作られた、三日月とか、その他の形をしていた。草の束を作るために、2 フート四方の草を綺麗にし、そして、それに白い土を被せ、黒い三日月をその上に描いていた；そこに、黄色の縁取りをし；そして、

太陽と、明けの明星を象徴化した同じ色の二つの輪が、さらに、小さな虹を表す、赤く塗られた細い長方形が描かれていた。

100. 仲間同士の小屋の祭壇

Crow 族のタバコ儀式



別の形の祭壇が、幾つかの平原に住んでいたインディアン達のサン・ダンスの小屋の中に作られていた。そして、通常は、少し掘り下げられ、綺麗に整備されたところにバッファローの頭蓋骨が安置されていた。クロー族の場合には、タバコの儀式を行うために選ばれた小屋の真ん中あたりに、やはり、長方形の場所を綺麗にし、その先端部に、集まったメンバーが、彼らの持ってきた薬の包みを順番に並べて置いていた。その長辺の端のところは、ちょうどクロケットの柱門を思わせるようなアーチ型をした柳の枝の列に結び付けられていた。そして、それぞれの列の外側には、同じ長さに揃え、きちんと平行に並べられた枝が出ていた。祭壇の中には、四列に並んだ、ビャクシンの小枝がらべられていた。(Fig. 100) この祭壇は、タバコの庭を想定したもので、— ビャクシンは、タバコが未だ緑の葉の状態であることを示していた — この枝は、火でも決して燃えることがなかったから、神聖なものと思われていた。しかし、祭壇の上におかれた動物の糞は、おそらく、タバコのパイプに火をつけるときか、或いは、燃えるのを助けるためのものだったのでないかと思われる。

他の原住民達と比べると、平原に住んでいたインディアン達は彼らの儀式の細かなところで、際立って消極的な面を呈している。マندان族のブルダンスの踊り手達は、バッファローの頭を被っていたし、また、アシニボア族の Fool という集団、彼らは、精霊のお告げに従うという意味で、道化役者のような振る舞いをしていたのだが、かれらは、奇妙な面を被っていたのに対し、平原のインディアン達は、面のようなものは全く被っていなかった。面を被ることに長けていた北西部の海岸地域のインディアンや、プエブロ族とかイロコイ族とは対照的に、そうした、変装と言うのが極めて稀であったという事実は、確かに残っているのである。さらに言うならば、面を被る習慣がなかったということは、われわれの地域でも彫刻というものがごくわずかにしか発展していなかったということからも説明される。こうした不完全さと結びついて、神を模倣しようという考えもまた、全くなかったというわけではないが、殆どなかった。ただ、よく見る例外として、以前に述べたものに加え、オキパ族では、役者が、よく神話に出てくる人を思い浮かべる、そんな仕草をしていた。

主要な儀式

際立って重要な儀式は、いつも、この上なく壮観なものであった。殆どの儀式に使われていたものは、つくすりの包みに関係していた。アラパホ族の人たちは、彼らの部族の偉大なる迷信の対象物として“平たい”パイプを崇めていた。(Fig. 14b) それは、彩されたティピー (Fig. 17) の中に、沢山の布の切れ端に大きく包まれて、そして、決して大地には触れることがないように注意深く吊り下げられて、保管されていた。アラパホ族の人たちは、そのパイプに、彼の長寿と幸せをかなえてくれるように祈願していたのだろう。

そして、それにお供え物をしていたのだろう。その保管者というのは、部族に伝わる神話の典型的なものに極めて詳しいただ一人のもので、彼は、四日間連続でその物語を話していた。彼は、他の重要な儀式と同じように、と多も上手にサン・ダンスを取り仕切っており、殆ど崇拜されるというような感じで尊敬されていたのだ。しかし、聖域のなかで実施されていた式典は、あまり感銘を与えるものではなかった。パイプは伝統的な様式に従って、保管され、取り扱われなければならなかった。このパイプがサン・ダンスのさなかに姿を見せたので、様々な劇的な出来事が同時に発生したが、それらは、この特別な崇拜物がなくても部族より共有されていたものである。

この地域における沢山の神聖なパイプの包みの形には、同じような認識が当てはまる。ブラックフート族の中に見られる一つのタイプについてはなんと 17 種類ものものがあつた。その持ち主達はみな、大変な尊敬を甘受したが、それを組織化しようとしなかった。もともとのパイプは雷によって啓示されたものであつたが、それを、熊が自分の娘からの動物への大切な贈り物としてブラックフートに授けた、付属的に様々な柄を持った贈り物なのであつた。包みとその中に入っているパイプは、博物館に展示されている (Fig. 15) ; 包まれている非常に沢山の付属物のなかには、鹿の胎児がある ; リス、ニオイネズミ、ミンク、そして、毛の抜けた鳥 ; そして、ネックレス ; など、そのほか沢山のものがあつた。故の包みは、春、一番に鳴った雷のときに開けられたが、これは、そのも主に対する約束した義務であつた。そして、誰かが急場に瀕したとき、このパイプを持ってサン・ダンスを踊ると太陽に約束したとき、或いは、包みが買われて、新しい持ち主に引き渡されるときに開かれていた。第三者は、その包みから語利益を得ると考えられていたが、しかし、結局、彼らはその持ち主の栄誉を与え、そして、かれに加護をもたらししていたのだ。しかしながら、彼は、その結果、沢山の気まぐれな、そして、厄介な規律に服従せざるを得ないような状況になっていた ; かれは、どの指を使っても、ものを指差すことができなかったし、また、親指は彼が見つけたものを摘み上げることもできなかった ; 彼は、彼のパイプを特別な方法で持っていなければ鳴らなかった ; また、決して、ベッドの末に座ってはならなかった ; などなど。彼の妻は、毎朝、焚き火を起こさなければ鳴らなかったし、その包みを、太陽の進行と同じ方向にある決まった距離に従って移動させなければならなかった ; そして、どんな条件であろうとそれを土の上に接触させてはならなかった。ブラックフート族の社会でのこうした神聖なパイプの重要性と言うのは、非常にはっきりしている。もう一度言うなら、相互に関連した儀式と言うのは、壮観な様式というものをもっていなかったのである。彼の包みを開くときには、その持ち主は、賛助者として非常に経験の豊富な人と、そして、そのほか、歌を歌ってくれるわずかの人たちを招待した。儀式そのものは、七つ一組の歌を歌い、簡単なダンスをしながら、ただ、その包みを開けるということだけだった — これらのことすべては、特定の限られた観衆の前で実行された。

こうした演出とサン・ダンスの間の非常な印象的な苦心して作られた、中間で実施されるものが、ウッドランドの西部地域の部族で **Grand Medicine Dance** と言われているもの

に相当する神秘的な儀式である。ウッドランド地域の典型的なものは、Midewiwin といわれる、Ojibwa 族の祈禱師の集団のようなものであったと思われる。この集団は、会員として認められた連中が、魔術を使って貝殻で撃たれ、まるで死んだような振りをして前に倒れ、そして、年寄りの会員により保管されるのであった。実際のこのやり方は、アイオア族や、オトー族といった南部スー族のものと殆ど同じような内容のものであった；実際に、オマハ族は、それぞれ、Shell の集団、Pebble の集団と呼ばれる二つの組織を持っていて、それらの集団も、射撃と生き返らせるということが、基本的な内容であった。新参者を“殺す”ということから離れて、メンバーは、自分達の魔法の力を誇示するためお互いに相手を打っていた。手短かに言えば、こうした集団の実態というのは、単純に、彼らの魔法の威力をシャーマン的に驚かせることであった。

クロー族のタバコ組織

これまで、いろいろな章で出てきたクロー族のタバコ集団は、新しい靈感の結果に基づくもので、神聖なタバコ、*Nicotiana multivalvis*、これは、彼らが吸っていた *N. quadrivalvis* (page 26) といわれるものと少し違っていたが、この木を栽培していた。この栽培と言うものから会員と、大きな意味で部族の両方にメリットがもたらされていた。そして、この会に所属するということにより発生する名声と言うものが、その主唱者たちに、大変な入会金を支払わせていた。そして、会に入った初心者には、種を譲り、通常は、その初心者の妻に対してと同じようにその育て方を、彼らにはちょうど父親としての関係があるかのように教えていた。冬の間は、新参者は、四度ほどタバコの歌を教わった。そして、彼の“父親の”集まりでの踊りに加わっていた。春の初めになると、沢山ある集会上、最も地位の高い会員達が集まり、栽培をするのに最も適した場所についての夢を話し、その場所を決めていた。こうした会員達は、会員達の種の入った袋をあらかじめ受け取っていて、それを水、捕らえた動物の糞、木の根、そのほか、様々な成分と混ぜ、種まきの準備をしていた。この労力のために、かき混ぜる人が雇われていた。

種の用意ができた明後日に会員は、時にはキャンプの全員が一緒に来ることもあったが、そのかき混ぜる人に化粧をしてもらった後、畑に出かけていった。見物人たちは、その時に警護役として働く武闘集団の者達によりきちんと整理されていた。女達が、背中に種の入った大きな袋を背負って運んでいた。(Fig. 101) 誰もが小屋に集まり、そして、御音楽を奏でる連中がゆっくりと歌を歌った。1人の女が一行に並んだその線からかなり前に進みでて、そして、彼女が特別に神聖なカワウソの毛皮を持ってきたので、彼女の集団が高い優先順位をとった。その後、順番に他の集団が、水平な列を作りながら最後の集団になるまで並んだ。そして、畑のある場所に向かい、その途中で四度ほど立ち止まり、その度にそこで、四つの歌を歌いながら進んでいった。最後の停止場所に来ると、多分そこは、目的地から 100 ヤードくらい離れていたのではないかと思われるが、タバコの袋を担いできたものが、それを足の速い運び役のものに渡した。彼は、そこからその袋を置くことに



101. タバコの袋 Crow 族のタバコ儀式

なっていた畑までは、競争をしたのだ；この競争の勝者は、その年に幸運を得、タバコのいい収穫が得られることは間違いなかった。沢山の見物人が、カワウソの皮の所持者が、かき混ぜ役の人にタバコを吸うためにパイプを提供した、その場所に集まった来て、そこで、タバコに対する彼らの夢を話していた。

この競争が終わったあと、会員達は、あらかじめ決められた場所に来て、そこを綺麗に片付け、そして、草に火をつける準備をした。それぞれの集団のかき混ぜ役の人が会員の数的大小に従って、畑全体を分けられるまで、それぞれのグループの場所を示す棒で

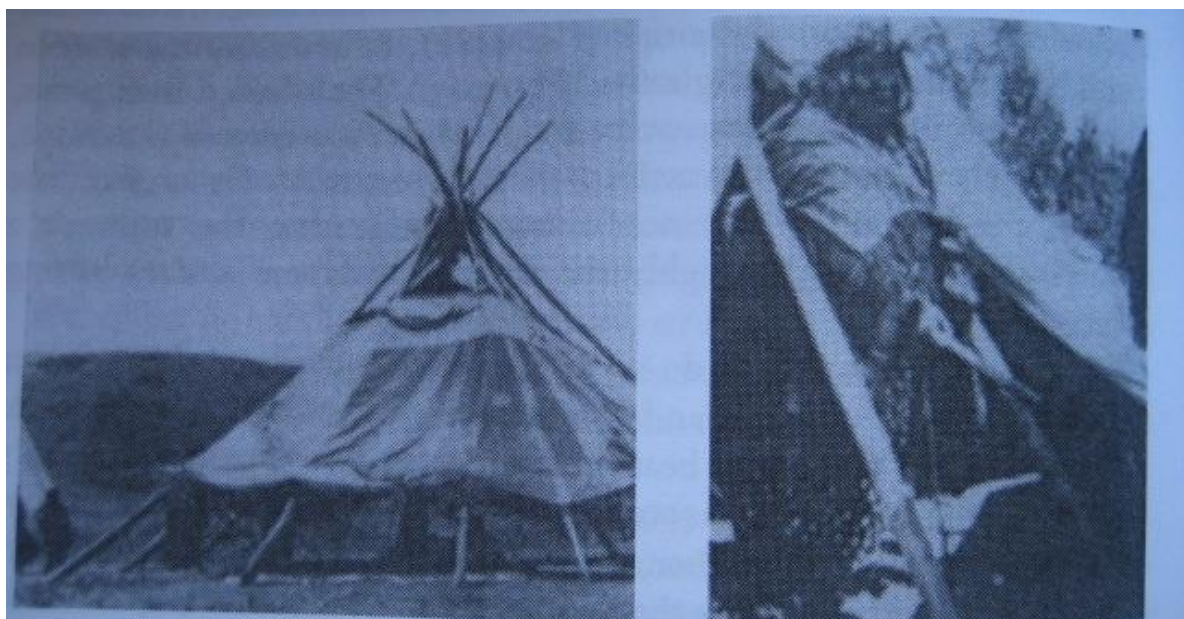
記しをつけながら、列の数を数えた。それぞれのグループの名だたる勇士が、その長方形になった畑の短い辺に沿い、横切って走り、もどってきて、低い声で、自分は戦闘集団にいたもので、敵を打ちのめし、そして、戦いから戻ってくる途中でタバコが元気に育っているのを見たと言っていた。かき混ぜ役の者は、大きな声でその伝言を発表し、そして、三度ほど、真似をしたあと、大地に穴をつき開けた。彼は、こうして種まきの案内役を務めていたのである。

ある集団がこの仕事を終わると、主人と、一緒に働いた彼の妻、男達が歌を歌い、男も女もいつもの場所で踊りをし、宴会を開いていた。種まきが終わると、会員達は、畑のはずれに横になり、そして、靈感が浮かんでくるのを祈りながら、タバコの歌を歌っていた。

1910年に検証された、大雑把に囲いの作られた畑の広さは、60 x 6 ヤードの広さがあり、幾つかの集団のために、6つの場所に分かれていた。そして、それぞれの場所は、一本、ないし、数本の柳の小さな枝の束で繋がっていた。また、それぞれの集団に属する、それぞれの組になった列は、小さな石で、区別ができるように印が付けられていて、その両端には、鋭く先のとがった耕すための棒が立てられていた。二つの小さな発汗小屋がその畑の反対側に建てられていた；それは、この神聖なタバコの葉の成長を促すはずのものだった。そして、そこで香煙がたかれていた。この場所からそう遠くないところに、大きな本格的な発汗小屋があった。以前は、新参者の入会が、この種まきの後、直ぐに行われていたが、後になり、この行事は、7月4日のお祭りの週まで延期された。どの集団の会員達も、この入会の式に参加することが許されていたのかも知れないが、入会式を行う集団だけが、贈り物を受け取った。祭壇 (Fig. 100 と 102) のついた入会式を行う小屋に泊まる権利は、とても名誉ある特権であった。準備小屋、ここでは、その新参者と、古いメンバーのものが顔に化粧をしていたのだが、この小さな小屋から行進が行われた；その模様は、靈感のなかで出てきたものであったが、靈感に出てきたものを描くという権利は、代価が支払われたときだけ、他のものにも譲ることができた。Gray-bull は、彼自身の母親に、彼女の持つ紋様を使う権利のために、一匹の馬と、オコジョの毛皮のシャツ、布、そして、お金を支払った。そして、それを今度は、4匹の馬と引き換えで、Plenty-coups に譲渡していた。すべての会員が化粧が終わると、準備の小屋の中で踊りが行われた。男達は太鼓をたたき、二・三人のものがガラガラ楽器を鳴らし、そして、女達は、むき出しになった神聖な小物を手に持って、いつもの場所で彼女達の体をゆっくりと揺らしていた。この式典を行う小屋の持ち主の妻は、パイプを持って、男達が太鼓をたたき、そして、歌を歌う間、出口のところに場所を取っていた。そして、三回、真似事をしたあと、彼女は、最初は女達が、そして、その後男達が一列縦隊になり、お供して、その小屋 (Fig. 102) から出て行った。(Fig. 103) 彼らは、四度ほど立ち止まり、その度に、四つの歌を歌っていた。それから、祭壇の西側には音楽隊が、そして、南と北側には、女達が座っている小屋に入っていた。そして、小屋に入ると直ぐに、戦士が、同じようにして畑のところまで、勇ましく出て行

った。(page 174)

そのようにする特権を持った男が、取引用のタバコ — これは、神聖なタバコではない、をつめたパイプに火をつけ、そして、パイプは厳肅に男達の間を回された。その後、叩き手が太鼓を鳴らし、歌を歌い、集まった人たちは、殆どが女であったが、伴奏に合わせて踊りを踊っていた。それぞれが、いたちの毛皮、ないしは、柳の小枝を、或いは、ワシの羽根でできたうちわか、それに似たものを手に手に、持っていた。踊りは、前に行ったり、後ろに戻ったりしながら、或いは、上下にして、また、手は、こぶしを強く握り、それを痙攣したように動かし、その場所で体を揺るだけの簡単なものであった。踊り手たちは組みになって順番に踊っていた。新参者のそれぞれが加わって踊りを踊るというのがしきたりであった。たとえば、冬の間彼に歌を教えた(page 173) 4人の男が、一列に並んでという具合であった。こうした催しは、お昼に、ご馳走を食べるため、そして、新参者の血縁関係のものが、新しく入ったものに贈り物を配るために中断する間以外は一日中続いた。そして、昼遅くなり、最後の歌が厳かに歌われ、お祭りが終わると、集まった人たちは、タバコの成長を象徴し、そして、それを促すために、柳の小枝か、或いは、太鼓の撥を持っていった。



102. Crow 族のタバコ儀式: 参入儀式の小屋の入口、ならびに、パイプを持った準備小屋から出てきた進行役の指導者

この儀式の後、直ぐにか、或いは、次の日の朝、新参者や新しい苦加入した結婚した夫婦が、タバコの入った袋が天辺に取り付けられた発汗小屋で指導する人たちに加わった。そして次の日の朝、おおむね入会が認められたものは、神聖なタバコも含め、どんな薬の治療剤でも手にすることも許された。順番にそれぞれのものやどうしても手に入れたい儀式のどんな特権でもその代価を払えば手に入れることができたのだ。

種まきと収穫の間、その集団の仲間達は、様々な規則を守らなければ鳴らなかったたとえば、種が発芽した後では、発芽した目をつぶしたりしてはいけないということで、シニーというゲームをしてはならなかった。この間に、仲間達はタバコの発育を促進させようということで、前にも述べたような簡単なやり方で、よくダンスをした。畑では、かき混ぜ役の人か、或いは、彼らに結果を報告する検証をする人のいずれかにより、四度ほど正式な検証がなされていた。そして、野生のさくらんぼが熟すころになると、仲間達は、— 理論的には、すべての集団が同じ日に、刈りいれて収穫を行い、村に戻っていった。そして、入会の儀式を行ったときとおなじような踊りをしていた。もし、十分に成長していない者があれば、はたけに何度も行くようにしていた。そして、最後の刈り入れが終わると、また、入会の儀式をした小屋に集まり、新しく収穫したタバコを祝う踊りをした。最後に、タバコの茎と葉が収穫されると、それを細かく切り刻み、クリークのなかに投じていた。

クロー族のタバコ集団は平原に住んでいたインディアン達の信仰に非常によい識見を



103. Crow 族のタバコ儀式: パイプを持った指導者が、準備小屋へ儀式を進行するためにかっている。途中でこのようにして 何度もとどまる。

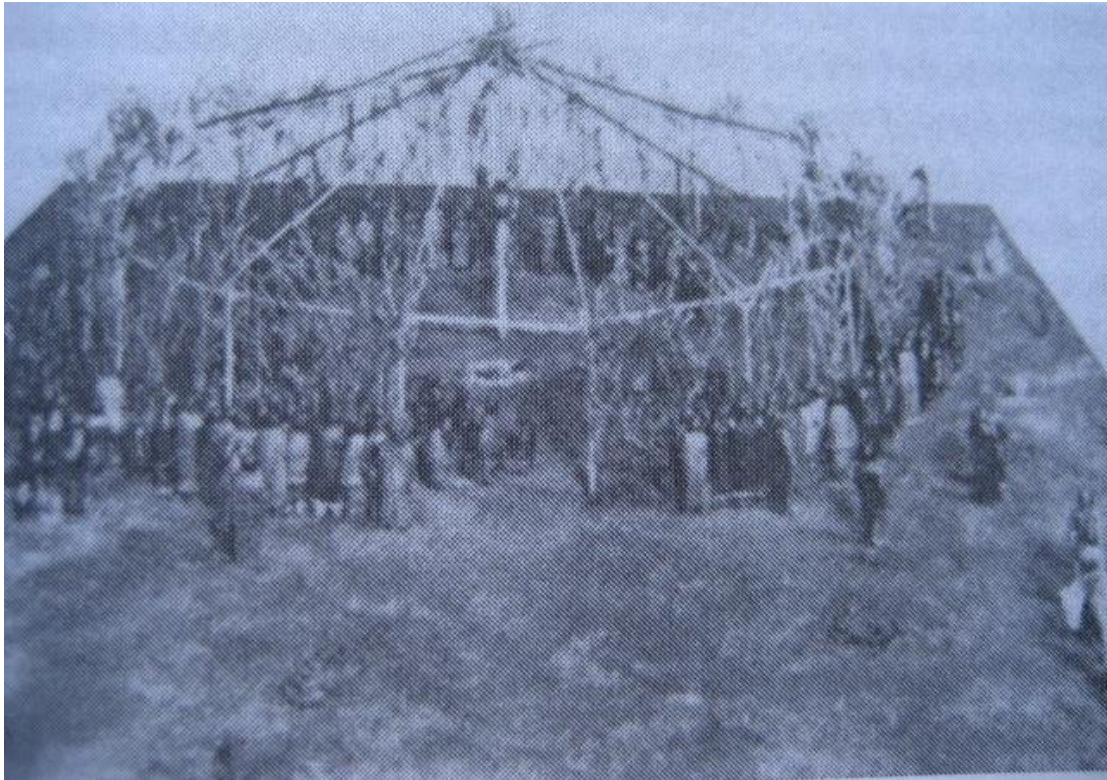
与えていた。その儀式と言うのは、高度に組み立てられている。そこには、様々な活動が論理的に付加されるというような中心となる考え方はない。クロー族のすべてのものが、神聖なるタバコと言うものを星とみなしていたが、しかし、その手順のなかに首尾一貫した星の世界に対する崇拝というものを見出すことはできない。もともとの伝説が、その慣習の伝達者として、一つ、ないし、沢山の星に、それを運んできたのだが、それを、幾つかの仲間の集団があらゆる生き物 ― 太陽からの伝達者として、いたちとか、トカゲ、なべ鶴、バッファロー、或いは、ワシ の創生のあとを辿ったのである。そして、彼らは、実際にそれを実行するなかで、この地域における特徴ある儀式のアイディア ― 祭壇とか、発汗小屋、芳香の煙、顔の化粧、四度繰り返す、などといったものを結合しているのである。靈感のなかの天の恵みは他の人に譲ることができるという認識が、無数の特別な特権を作り出すという表現、つまり、余分な価格で支払いをしてくれる人を見つけ出すことの裏づけとなっている。文化というものが、武勇というものを強調しているので、戦士の大手柄というのは、星とか、明言された儀式の目的 ― 部族の繁栄、といったいずれかに結び付けて、何もすることがなかったけれども、彼らは、沢山の人たちが見ている前で、彼らの手柄というものを見せ付ける機会をえるのである。

サン・ダンス（太陽踊り）

およそ 20 の部族がいる平原に住んでいたインディアン達の間で、サン・ダンスというのは、最も人々の目を引く宗教的な祭事として位置づけされている。このお祭りは、ポウニー族、ウィチタ族、オマハ族、そして、そのほか、南部のスー族によって実施されていたばかりではなく、そのお祭りの要素は、ポウニー族やオマハ族の間に見ることができる。その殆どの形態に関して、自己苦悩的なものであるので、内務省は、1904 年にその実行を禁止したが、1935 年には、禁止令が取り除かれたので、それ以来、いろいろな部族が、現代風なやり方が取り入れられてはいるが、その踊りを実行している。このお祭りは、アラパホ族、シャイアン族、そして、ダコタ族の間では、最も緻密なものであり、すこし貧弱ではあるが、最近では、西部の周辺の部族にも広がっている。コマンチ族は、近くのカイオア族のお祭りの状況を少し見た後に、彼らなりにそれを簡素化したような形で、1874 年に実施したことがある；ウテ族は、1890 年代にこの踊りを取り入れ、それ以来、この踊りを大事な儀式として執り行っている。

クロー族のタバコの儀式の真髄を保持するということは、それは、まさしくサン・ダンスを保持するということである：このことは、特別な女神、それにつけられた一般的な英語の名前は間違っているようであるが。この女神に対する崇拝について、考えを改めるというものではないが、しかし、それは、この地域の広範な領域にわたり、どこでも目にするのできるおろかな要素から、その殆どが出来上がっていた。その最も冴えたるものは、沢山の客観的な特徴が広く行き渡っていたことであるが、その一方で、そのお祭り

を保持するということの説明や見せ掛けだけの動機というのが、地域によって全く異なっているのである。ただ、一般的に言えることは、それは部族の特質ということであった：踊りは、冬の間、散り散りになっていたものが、再び集合してきた後に執り行われた、たとえば、春の終わりごろとか、夏の時期の初めと言う具合である。沢山の部族の間では、このお祭りは年中行事であったが、それは、苦悩をもつ部族の者達の、もし、その苦難から逃れるのであればこのお祭りをしたいという祈願によりずれることもあった。クロー族



104. Arapaho 族のサン・ダンス

ある場面を表現している場面

105. Crow 族のサン・ダンスで使われる神聖

な人形

の場合には、極近親のものが殺された相手の部族に復讐をどうしてもしたいという、悲嘆にくれた人のためと言うことだけがその動機であったので、数年のあいだこの儀式が継続して執り行われていた。儀式のために呼ばれた聖職者がこのダンスを執り行っていた。まず、あらかじめ準備されたティピーで、誓約したものに説明をし、一方、儀式の秘伝にはあまり関係していないような沢山の部族のものが、大きな儀式の建物を作るために必要な分だけ集められた。殆どのグループのものが、その小屋のために立てられる真ん中、もしくは、最初の柱にまつわる荘厳さを信じていた：彼らは、適当な木を探しに行き、特別に認められた人 ― つまり、貞淑な女 に最初の斧を振るわせ、その倒れた木を大手柄として認められるような敵になぞらえて取り扱っていた。この柱を立てるまえに、このの立てる役のものは、束になった羽と、バッファローの毛皮、そして、お供え物を、その柱の分かれるところに上げていた。通常は、この束というのは、ワシ、或いは、雷鳥の巣と説明されていた。クロー族のものの例外的な特徴は、形が非常に大きなティピーだけだった；通常のものは、円形に囲ったもので、そこから、横棒の垂木が、中心の柱に向かって延びていた(Fig. 104)。この囲まれた中は、バッファローの頭蓋骨が置かれた綺麗な場所があり、星空の世界を思わせるものを形作っていた。そして、祭りの主役が入ってくる前に、戦士達がやってきて武闘の英雄的行為を披露していた。(クロー族、カイオア族、シャイアン族、オガララ族、ヒダツサ族)



普通、誓約者と彼に関係した人々、たとえば、シャイアン族では、彼の血縁関係集団の仲間、は、ダンスをし、力を授かるように祈願するときには、しかつと、真ん中にある柱の先を見つめ、こうして、数日の間、飲まず食わずの断食をした。クロー族の誓約者の場合には、彼は、彼に頭皮のはがされた敵の姿が靈感として浮かび上がってくるまで、彼の世話役の聖職指導者から渡された、神聖なる人形(Fig. 105)を見つめていなければならなかった。自分自身をさいなむという行為は、必ずしも一般的なものではなかった：ある軽率なものは、自分の胸とか背中に、焼き串などを使い、これを突き刺していたり、真ん中の柱の一方の端にロープを巻きつけ、別の端にはその焼き串をつけ、そして、踊りをする人は、自分の串がゆるくなるまで、このロープを引っ張っていた。踊りそのものは非常に単純なもので、笛を吹いている間、彼らのつま先を上げているだけのものだった。こうし

た苦行のようなものについては、カイオア族、ウテ族、そして、シャイアン族などは全くなかったことである；ただ、ダコタ族やポンカ族だけが、こうした苦行というものをこのお祭りの主要な儀式として実行されていたが、やはり、通常行われてはいたけれども、それは、どこでも他の踊り手のための奉仕的なものであった。

こうして、沢山の客観的な特徴というものが、この地域のでこにも、ある一つの出所から分散して行ったにちがいないと思われるように、似たような形で存在している。しかし、この儀式の主張されている目的というのは、非常に広範にわたって変化している。われわれは、このお祭りのなかでの儀式的な慣習というものはずっと古く、そして、当然のことと思われる目的というものは、後になって付属的に付け加えられたものであるということに結論付けなければならない。そして、この踊りは、単に、宗教儀式のある一部にすぎず、もっと大きな意味では、審美眼的な喜びや見物人を喜ばすためのものであったというこがはっきりしている。（page 113）

最近の動き

二つある最近の宗教的な動きについては注意を要する—それは、ゴースト・ダンスとペヨーテ・カルトである。

ゴースト・ダンスは、その名前は、インディアン達は彼らの死とともに大団結するという信仰から来たものである。その初期の段階（1870）の形は、ネバダ州のパピオツソインディアンによって、起こされたもので、彼は、霊界をさ迷い、死者はやがて大地にもどり、そして、古代の生活が動、物の狩猟とともによみがえり、窮乏が生ずるだろうと説いた。1888年になり、この預言者の若い親族のウォボカが、この宣託を新しく解釈した；彼の授かった個人的なお告げに基づき、彼は、彼の仲間の部族のものに、死に伴い大団結をしていくダンスを教えた。彼は、この教条を、白人と戦わず、彼らとともに平和を甘受するという倫理的な教えと結びつけた。時々彼は、キリスト教の信者と多神教徒と一緒にした。あるときには、自分は、老化した世の中を再生するために戻ってきたキリストであるとさえ言っていた。この世の中を刷新することの必要性こそ、古く、そして、広く行き渡っていたアメリカインディアンの概念なのである。

ウォボカの先任者達は平原のインディアン達には興味を示さなかったが、若い救世主が彼に対する礼賛を受け入れることに熱狂的な形で現れた。その一つは、お互い意思疎通を図るということは、偉大なる進展であって、それゆえに、離れて生活しているお互いに関心のあるインディアン達は、容易に預言者のもとを訪れることができるというものだ。次は、1888年までにバッファローの姿が見えなくなったということが、この上ない苦難をもたらしたのであり、これが、合衆国政府の代表との相互の誤解により非常に悪化したというのである。テトン・ダコタ族、アラパホ族、シャイアン族、そして、カイオア族は、彼らは実際には、完全にその趣旨を変えていたのではあるが、彼らは、もっと新しい信仰を受け入れることについて熱心であった。平和信仰者のパピオツソ族は、決して謀反のよ

うなものを頭に描いていたわけではないが、一方、戦闘好きな平原インディアンの中にはこのことが、教条の極めて重要な点となった。不満が種となり激しい怒りに煽り立てられて、平原に住んでいたウォボカの信奉者達は、彼の親善の精神を、白人は皆殺しにすべきだという神聖なる戦争論に置き換えてしまった。敵の民族の身につける衣服や生活習慣は、可能な限り排斥され、一方で、伝統的なゲームのような古い生活習慣がしきりと取り入れられた。膨大な数の復古主義者達の集まりのなかで、男や女は、催眠状態の霊界の世界に身をおき、そして、現に戻ると、彼らが見た幻想 — 死んだ血族の者達、大群のバッファローのことなどを、話した。ダコタ族の場合に、もっと特徴的だったのは、彼らが、防弾チョッキを連想させるような、象徴的紋様の飾りのついたシャツを工夫していたことである。

この崇拜の勢いのもとで、シッティング・ブル、彼は、1890 年の 12 月 15 日に、インディアン保護監察官により殺されたが、その彼の指導の下、テトン族の間に非友好的なデモンストレーションが勃発した。そして、二週間後にウーンデッド・ニーで戦闘が起こり、ここで、31 人の騎兵隊と 128 人のダコタ族のものが死んだ。この戦闘以後、武装衝突は事実上なくなったが、しかし、未だに幾つかの部族の間には、時と緊迫状態が起きている。

現代の動きに関する最も示唆的な事実、大盆地の崇拜思想と、感化された幾つかの部族の指導者により平原のインディアン達の中に芽生えた小さな変化を取り入れた平原のインディアン達による急激な変化である。とりわけ目を見張る発展は、信奉者達によって古いゲームに対して伝えられた宗教的な特色のような、興味の類であった。たとえば、パウニー族は、彼らの踊りのなかでシニーボールやフープのようなものを行っていたし、その力を借りて靈感を取り込もうとしていた；彼らは、また、儀式として手で行うゲームもやっていたが、その正規のやり方は、靈感のなかで暗示されたものであった。

ペヨーテ信仰に関する研究のなかで Weston La Barre は、ピヨーテ、(*Lophophora williamsii*) とは、“ Rio Grande 溪谷とか、南の地方に育つ、小さな、とげのないにんじんの形をしたサボテン ” であると述べていた。その丸い天頂、個々だけが地表に現れているのであるが、これを切り取り、そして、“ボタン” のような形になるまで乾燥する。この植物は、北部メキシコのメスカルサボテン(*Agave Americana*) と混同してはならない。九つの催眠性のアルカロイドを含んでいる、このピヨーテは靈感の幻覚と、目の瞳孔を広げるような心理学的な錯乱状態を呼び起こす。最初に起こる現象は、うきうきした気分になり、ついで、憂鬱状態になり、吐き気がしてきて、眠られなくなり、最後に、これを食べた人は数時間も、光輝かく灵感の世界をさ迷うようになる。

この睡眠状態になることを主としたこの崇拜は、平原のインディアン達には新しいものであり、1870 年代以前には、カイオア族までは浸透していなかった。そして、それ以後、14 年後になるまでそこに入ってきたというはっきりした痕跡はない；しかし、メキシコの原住民達は、この植物を 16 世紀のころくらい、早い時期から使用していた。また、コラ族

は、1754年にこのピヨーテの儀式を実施していた。その植物は、テキサスの北の地域が原産地ではないので、平原のインディアン達のピヨーテ信奉者達は、熱心にその産地に足を運ぶか、或いは、それを購入したのであろう。ゴースト・ダンスの場合ように、平原のインディアン達は、もともとの普及の源となっていてところで発展した宗教的な観念を大きく変化させていた。メキシコでは、季節に応じて為される宗教的な儀式の主な主題は、信仰の監督と、戦闘とか穀物栽培、或いは、鹿の狩猟での成功祈願であった；もちろん、底には踊りも含まれていたが、しかし、ピヨーテを食する集団はなく、また、排他的でもなかったし、女達が行事の推進に一役買うことさえあった。平原のインディアン達の間では、規則の重要性としてではあるけれども、医療は基本的なものではなかった；当初は、戦闘というものが抑圧されていた；踊りは一般的には行われてはいなかった；儀式というものがことあるごとに執り行われていた；そして、ピヨーテの礼拝者が、最初は女達を排除した組織をしきっていた。メキシコ人たちは屋外に集まり、そして、平原のインディアン達はティピーの中に集まっていた；平原のインディアンの部族は、タバコを抑制していたが、タバコはメキシコでは何の意味ももっていなかったが、かれらは、ピヨーテ信仰とメキシコではよく普及している宗教的儀式の競争やボールゲームと結びつけるようなことはしなかった。こうした顕著な違いとはかかわりなく、これらの領域の間には沢山の類似性がある。ほんに二・三の例を上げるなら、両方の地域のピヨーテは、儀式的な旅に集中していたものであり、その祭事は、夜執り行われていて。そのあと、儀礼の朝食が続いていた。その食事には、いぶされたトウモロコシ、甘い水、そして、骨のない肉などといったものが目だった。

カイオア族で実施されていたように、当初の平原のインディアン達のあいだのピヨーテ信仰には、古代の平原のインディアン達が信仰していた超自然信仰の特徴をもついろいろな形がある。サン・ダンスの様式にのっとり、信仰を持った人たちによる会合が開かれる；ピヨーテを通して、靈感への探求が、治療の動機に優先して行われる；あらかじめ準備された発汗小屋があり；そして、神聖なる数字の四という数が出てくる。集団組織に対して、その会議の主唱者は、そのために必要な費用をまかなう責任があり、そして、ピヨーテを配る；彼は、その儀式の指導者を選び、彼は、太鼓のたたき役と火の管理人の助けを借りる。その指導者の用具一式のなかには、杖と、ひょうたんのガラガラ、ワシの骨でできた笛、水が少し入った太鼓、そして、杉の木の香りの元が含まれている。儀式の執行の一番大事なものは、通常、粘土質の土で作られていた三日月の形をしたピヨーテの祭壇である。

儀式のなかでの修正の基本として、平原インディアンの経験した靈感の様式が与えられ、カイオア族の最初の頃のもの、明らかに指導者の個人的なお告げによって変えられていた。幾つかの部族のなかには、バイブルを読むとかいったようなキリスト教的な要素さえ入ってきていた；三人のオサゲ族の事務官は、三位一体の代わりであるといわれた；オート一族が作った鳥を想定した灰で作ったものは、イエスの洗礼における精霊の下降として説明されている。事実として、ピヨーテ崇拜は、多神教徒とキリスト教との両方から、象徴

主義として断ち切られている。指導者の杖は、ウィチタ族では、“生命の杖”であり、アイオワ族では、救済者の杖とされている。

おそらくは、ピョーテの悪魔的な影響のために、―― 議論の余地のあるところではあるが、その使用を検視するための沢山の試みが着手された。その対策として、部族間を越えた原住民アメリカ教会というものが設立された。この崇拜が、オクラホマに入植したもともとは東南部に住んでいた部族に普及しているのと同様に、ウッドランドや大盆地地域（**Basin**）の集団に、非常に広い範囲にわたり広がっているということは、注目に値することである。